

Future of Adoption

フューチャーオブアドプション



幸せな家族を探している 被災犬・猫の未来を見つめて

2011年3月11日の東日本大震災から3年。今現在も数多くの被災ペットたちが、シェルターでの生活を余儀なくされています。

「Veterinary Adoption」では、福島県動物救護本部・三春シェルターに保護された被災ペットたちの譲渡をサポートしています。



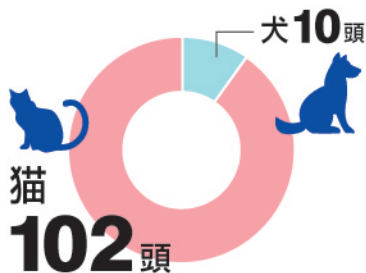
Veterinary Adoptionからのお願い

- 1 ホームページ・ブログ・SNSでの情報発信
- 2 当サイトのバナーの設置

当サイトの保護犬・猫の譲渡件数は順調に伸びてはいるものの、距離が離れた福島県の被災ペットには、里親がなかなか決まらない状況です。3年経った今でも福島県には、新しい家族を待ち望んでいる被災ペットたちがいることを広く情報発信して頂き、彼らの未来を一緒に切り開いて頂ければ幸いです。ご協力のほど、よろしくお願い致します。

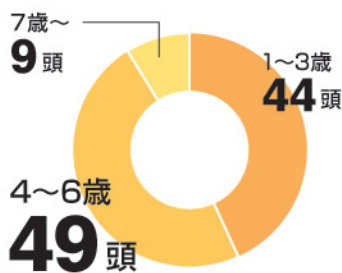
「福島県動物救護本部・三春シェルター」で暮らす被災犬・猫の現状

犬と猫の割合



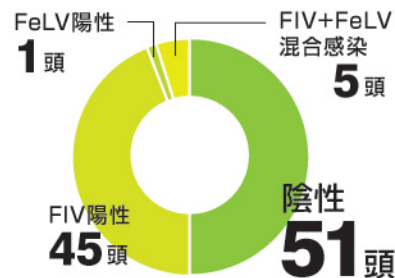
猫の里親が圧倒的に少ない現状
被災犬に比べて、被災猫の里親希望者は圧倒的に少ないという現状があります。

被災猫の年齢



震災後に生まれた被災猫も…
被災猫には、比較的若い猫が多く、震災後に生まれたケースも稀ではありません。

FIV、FeLVの感染率



被災猫の半数がウイルス感染
FIVやFeLVに感染している被災猫が半数。正しい情報を里親希望者に伝え、ご納得頂いた上で譲渡を行います。
※FIV、FeLV感染猫はそれぞれ適切な環境下で隔離されています。

Future of Adoption 最新情報 2014年7月11日現在

現在の登録数
保護犬



55頭

現在の登録数
保護猫



138頭

これまでの譲渡成立

226件



福島県動物救護本部・ 三春シェルターで暮らす

茶々ちゃんが保護されたのは、2012年9月26日のこと。福島県沿岸部にある浪江町川添上加倉で保護されてから数ヶ月間はケージの中にある箱にこもっていました。10ヶ月で徐々にケージの外に出られるようになり、スプーンからご飯を食べてくれるようになりました。その後、救護本部の先生・スタッフの方々による馴化プログラムも進み、1年半経過してようやく自分からスリスリして撫でて欲しそうにしてくれたり、名前を呼ぶと振り向いたりするようになり、2014年5月、ようやく新しい家族に出会うことが出来ました。

“FIV陽性”によって難しくなる譲渡

震災から1年数ヶ月、厳しい環境下で生き抜いた茶々ちゃんは、もともと臆病な性格もあったのか、人に慣れるまでかなりの時間がかかりました。感染症(FIV陽性)にかかっていたこともあり、マッチングすらほとんどなく、新しい家族が見つかりにくい状況でした。そんな中、大阪からお越し頂いた里親希望者と出会うことが出来ました。



茶々ちゃんの新しいご家族からのお便り



ゆき(茶々ちゃん)
施設:三春シェルター

私は以前、犬との生活の経験があり、もし里親になるなら犬で、と考えていました。しかし、こちらのサイトに辿り着き、【被災ペット譲渡受付】のコーナーの猫の多さに驚いた私は、経験はありませんが猫の里親になりたいと強く思うようになりました。

沢山の猫の中から、ゆきに決めたのは一目惚れでした。

写真を見た瞬間「あ、この子!!」という直感のようなものがあつたのです。申し込みをしてからは、事務局の方とのメールで、色々な質問や疑問などに丁寧にお答えをいただき、不安なく迎える準備をすることができました。5月24日福島県三春シェルターへ迎えに行き、掃除やご飯のお手伝いをする中で、実際の生活の様子が見られたり触れ合えたりして、ボランティアに参加して本当に良かったと思っています。スタッフさんやボランティアの方々、獣医の先生と色々お話できたこともとても良かったです。

我が家に来てから1ヶ月、まだ籠もっていることが多いですが、少しずつ姿を見せてくれるようになってきています。リラックスして寝ている姿が見られた時は本当に嬉しく、またとても癒されました。ゆきが居てくれて良かったと思います。ゆっくり、ゆきのペースで慣れてくれるよう、これからも大切に見守っていきたいと思っています。

大阪府在住 茶々ちゃんの新しいご家族様より

Veterinary Adoptionの紹介バナー利用について



当サイトに、新しく紹介バナーをご利用頂ける**ブログパーツ用バナー**を設置しました。ぜひブログやSNSなどで当サイトをご紹介ください。

編集後記

当サイトが“福島県動物救護本部被災ペット”の掲載を始めて5ヶ月が経ちました。私自身シェルターを何度も訪問し、そこで生活している子たちを取材、112頭の掲載に至りました。そこでは“新しい家族のもとで幸せな生活を”という願いのもと、救護本部の先生とスタッフの皆さんが献身的に日々の健康管理を続けています。

3年経った今だからこそ、避妊去勢手術もほぼ全頭終わり、馴化やしつけなど個々のプログラムが組まれるまでになりましたが、実際に被災された先生やスタッフの方々のこれまでの努力、活動は並大抵なものではありません。当サイトが出来るのはほんの微力なことかもしれませんが、それでも、Veterinary Adoptionを通じ、風化しつつある福島の被災ペットに少しでも関心を持ってもらえたら、そしてこのシェルターにいる全ての被災ペットに新しい家族を見つけるきっかけとなればと願っております。



共立製薬株式会社
獣医師 土肥 朋子